# 学位論文提出までの7年間を振り返って

平成23年３月修了生　**荒井　きよみ**

修士課程進学から３年、続く博士課程では４年、計７年間もの歳月をかけ学位論文を書き上げることができました。長い道のりを歩み通せたのは主指導教員の伊藤葉子先生をはじめとする先生方、博士課程係の職員の方々、そして職場の同僚といった周囲の皆様の寛大なご支援によるものです。私の学位は多くの方々の賜物と感謝にたえません。改めまして深く感謝申し上げます。

思い起こせば、育児休業から復帰した2003年の夏学部時代の恩師から１本の電話をいただいたことから､私の生活が一変することになりました。それは「千葉大学大学院教育学研究科家政教育専攻（現職教員特別選抜）を受けてみないか」というお誘いでした。学部卒業後すぐに現職に就き、ぼんやりと「私の授業は役立っているのか」と疑問がもたげていた頃でもありましたので、このお話は飛び切り魅力的に映りました。

いつでも軽率な私は固い決意があったわけでもないまま、大学院修士課程へ進学、と同時に異動促進校と呼ばれる３校目の高校へ異動となりました。2004年４月、新しい職場と約20年ぶりの学生生活がスタートしたわけです。有難いことに研修を認めていただき、週１回、全く異なる視点での時間を持つことが許されました。

久しぶりの大学で過ごす時間は限られてはいましたが、新鮮な体験の連続でした。錆付いた頭を稼動させつつ通うなかで研究手法としてのM-GTAに出合い、「創発」といった研究のキーワードにめぐり合ったのもこの頃です。日本家庭科教育学会での初めての学会発表を体験し、研究の面白さを噛み締めました。

伊藤先生の熱心なご指導のお陰で、2006年12月に修士論文提出が叶い、当初４年計画であった修士課程を３年で切り上げることができました。しかしその喜びの一方で、新たな決断に迫られました。東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科へ進むべきかどうかという選択です。迷いに迷いました。職場や家族の負担を考えれば悩む間もなくあきらめるべきところ、研究の深みにはまり、受験に挑んでしまいました。

結局2007年４月博士課程に進学、８月にはマレーシアで行われた国際学会（14th BIEBBIAL INTERNATIONAL CONGRESS OF ASIAN REGIONAL ASSOCIATION FOR HOME ECONOMICS）でポスター発表する等、それは刺激的な展開となりました。にも拘らず論文を投稿するも、掲載が認められません。修正し、初めて論文が採用されたのは翌年５月、７ヶ月もかかりました。この道を選んだものの、なにより自分の力が疑わしく、悩み焦り、時間だけが過ぎていくような気がしました。

なかなか研究デザインが描けず、気がつけばＤ２と呼ばれる位置におり、職場も専門学科の高校へ異動（４校目）となりました。新しい職場では研修も認められず慣れぬ環境の中、論文を投稿するも通過できない日々が続きました。

2009年４月、なんら変化の兆しも見えずＤ３になりました。異動２年目から研修は認められましたが、相変わらず論文は再投稿、不採用という結果でした。しかし、ある時ふと、査読の先生方からのご指摘がすっきりと理解できるようになったのです。翻ってみれば、ご指導してくださった先生方が仰った意味を本質的には把握できずに、それまでは闇雲に書き殴っていただけでした。

必要な文献を選び出して正確にレビューをする。この作業が難しく、そして重要なわけです。ここから論文をまとめていく方向性が見えたと思います。どのような方法でアプローチし、どのような結果が得られたのかを確認する。先行研究を読み込むと自分との距離感をつかむことができ、オリジナリティを説明することができます。けれども、ここまで辿り着かなければそれは分からなかったのです。文献収集にあたっては、千葉大学はもちろんのこと、連合学校の図書館だけでなく、国立国会図書館や東京大学図書館、他学部研究室の教職員の方々に大変お世話になりました。

図らずも、あるいは案の定Ｄ４となった2010年、ようやく暗闇から抜け出し、６月には予備審査会、10月に審査会を開いていただき、12月には学位申請のための書類提出へと至りました。年が明け、公開審査では審査員の先生方から貴重なご指摘を賜り、どうにか論文を完成させることができました。

スティーブ・ジョブズ氏が語った「自分のハートと直感に従う勇気を持ちなさい」の一節を心に刻むとともに、私を支えてくださった方々が誰お一人欠けても到底成しえなかったことと、今こうして振り返る次第です。